

## 1 疫病

### A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は土壌伝染し、ピーマンの他にトマトやウリ科作物など多数の作物を侵す。
- 2 一般に、排水不良の土壌で過湿状態のほ場に発生しやすいので、排水を良くし、高畦とし、浅植えにする。
- 3 発病してからでは手遅れになりやすいので、ほ場の環境を良くするとともに、防除は予防を重点におく。

### B 耕種的防除法等

- 1 激発地では連作を避ける。この場合、ナス科、ウリ科は相互に伝染源となるので、他の作物の導入を図る。
- 2 ほ場の排水を図り、高畦、浅植えとする。
- 3 プラスチックフィルム等でマルチを行い、地表からの土のはね返りを防ぐ。

## 2 うどんこ病

### A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は多くの作物に感染する。特に、ピーマン、トウガラシ及びオクラでは胞子を良く形成することから、トウガラシ及びオクラの発病株は伝染源となるので注意する。
- 2 空気の流れが停滞し、乾燥した状態で発生しやすいので、ハウス栽培では換気に努める。
- 3 早期発見に努め、発生初期に防除を徹底する。

### B 耕種的防除法等

密植を避け、過繁茂にならないように管理する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項

生物農薬は、他剤と混用すると成分に影響するので、単剤使用を基本とする。

## 3 苗立枯病

### A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌はリゾクトニア属菌による場合が多く、土壌中で長く生存し、土壌伝染する。また、多犯性で多くの作物に感染し、幼苗期に発病する。
- 2 多湿土壌で発病しやすく、軟弱徒長の苗では多発しやすいので、かん水過多にならないようにするとともに、栽培管理に注意し、健苗の育成に努める。

### B 耕種的防除法等

- 1 床土は無病土を用いる。
- 2 完熟たい肥を用いる。
- 3 かん水は適正に行い、水分過多を避ける。
- 4 軟弱徒長にならないように適正な管理を行う。

## 4 斑点細菌病

### A 生態と防除のねらい

- 1 病原細菌は種子伝染し、また被害残さで土壤中に残り、伝染源となるので前年に発生したほ場では発病前から予防防除に努める。
- 2 高温多湿で発病しやすく、窒素過多は発病を助長する。また、晴天が続いた後降雨が連続するような年に発生が多い。多発後の防除は困難なので、ほ場の環境を良くし、発病初期に防除を徹底する。

### B 耕種的防除法等

- 1 無病種子を用いる。
- 2 ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。
- 3 プラスチックフィルムでマルチを行う。
- 4 窒素質肥料の多用は避けまた肥料切れにならぬように適正な肥培管理を行う。
- 5 初期の発病葉は早目に除去する。

## 5 青枯病

### A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は土壌伝染し、ナスの他トマト、ピーマン、タバコ、イチゴなど多数の作物を侵すので、ピーマンを初めて栽培するほ場についても注意が必要である。
- 2 発生は地温が20℃を越えるころから始まり、夏期の高温時に発生が多い。また、土壌が多湿の場合に発生が多いので、ほ場の排水を良くする。
- 3 耐病性台木を用いた接ぎ木栽培は有効であるが、耐病性台木を侵す菌群があるので選定に注意する。
- 4 植え傷みや線虫の加害、乾湿の差が激しいかん水法等による根傷みは感染を助長するので注意する。

### B 耕種的防除法等

- 1 耐病性台木に接ぎ木する。
- 2 床土は無病土を用いる。
- 3 夏期高温時に太陽熱土壌消毒を行い、病原菌密度を下げる。
- 4 定植時にできるだけ根を傷めないようにする。
- 5 夏期の栽培では地温の上昇を防ぐため敷わらなどをする。
- 6 ほ場の排水を良好にする。

## 6 軟腐病

### A 生態と防除のねらい

- 1 病原細菌は、土壌中で越冬し、根の傷口や摘芽あとなどの傷口から侵入する。湿度が高いと発病しやすいので、ほ場の排水に努め、摘芽などの管理作業はできるだけ晴天日に行う。
- 2 タバコガなど食葉性害虫の食害痕からも病原細菌が侵入する場合がある。

### B 耕種的防除法等

- 1 ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。
- 2 管理作業は雨滴や朝露のある場合は避け、できるだけ晴天日に行う。
- 3 発病株は除去し、発病株にふれた手やハサミは良く洗ってから作業を行う。

## 7 ウイルス病

### A 生態と防除のねらい

- 1 モザイク病の主な病原ウイルスは、トウガラシマイルドモットルウイルス（PMMoV）、キュウリモザイクウイルス（CMV）である。PMMoVの第一次伝染源は、種子及び土壌で、発病後は汁液伝染により急速にまん延するので、発病株にふれた手やハサミは、良く洗ってから作業するなど二次伝染の防止に努める。PMMoVは、T o MV（トマトモザイクウイルス、以前のタバコモザイクウイルス・トマト系）に抵抗性を持つ品種も侵すので注意する。PMMoVは虫媒伝染しないが、CMVはアブラムシ類により伝搬する。
- 2 黄化えそ病は、トマト黄化えそウイルス（TSWV）によって引き起こされ、アザミウマ類により伝搬し、土壌伝染、種子伝染はしない。汁液伝染は起こりにくい。

### B 耕種的防除法等

- 1 PMMoV
  - 1) 生育初期の発病株は、早急に抜き取る。
  - 2) 発病株にふれた手は石けんなどで良く洗い、ハサミ等の管理器具は次亜塩素酸カルシウム溶液または第三リン酸ナトリウム10%溶液に浸してから作業を行う。
  - 3) 耐病性品種を栽培する。ただし、PMMoVは、さきがけみどり、ニシキ、エースなどのT o MV耐病性品種も侵すので注意する。
  - 4) 発生したほ場では、栽培終了後に米ぬか等を用い、2か月以上の残さ腐熟促進処理を行う。この間、2～3週間間隔で耕耘すると効果的である。残さ腐熟促進処理終了後、土壌くん蒸消毒を行う（鹿児島県の促成栽培ピーマン産地のための脱臭化メチル栽培マニュアルより抜粋）。
  - 5) 発生したほ場では、次作の定植時のウイルスの感染を防ぐために、生分解性ポットの利用も有効である（鹿児島県の促成栽培ピーマン産地のための脱臭化メチル栽培マニュアルより抜粋）。
- 2 CMV、TSWV
  - 1) 防虫ネットやシルバーテープなどの利用により、媒介昆虫（アブラムシ類、ミカンキイロアザミウマ等）の飛来防止に努める。
  - 2) 発病株は抜き取る。
  - 3) CMVでは発病株からの手、ハサミなどによる伝染を防止する。
  - 4) ほ場周辺の雑草は、媒介昆虫の寄主植物となり、ウイルスの伝染源となる可能性があるため、雑草を除去する。

### C 薬剤防除のポイント・注意事項

- 1 媒介虫の防除（ナス科虫害の項を参照）
  - 1) CMVに対してはアブラムシ類の防除を行う。
  - 2) TSWVに対してはミカンキイロアザミウマ等の防除を行う。